

金春禪竹の翁論と住吉明神

金賢旭*

目次

- 一、はじめに
 - 二、姿をあらわす神
 - 三、赤い衣を纏う住吉明神
 - 四、塩土老翁と古海人老翁
 - 五、住吉明神と人丸
 - 六、結びにかえて-禪竹の翁論
-

一、はじめに

十三世紀末に成立した「翁」は、能やその他の日本芸能のルーツといえる。「翁」芸は、老体の翁神が祝言・祝舞を行い、天下泰平を祈念する祝禱芸であるが、その成立は神としての翁の変遷という思想史の流れの問題と緊密に結びついている。つまり、院政期ごろから中世にかけて、翁の形象をもつ神が多くあらわれ、翁神の信仰が盛んになるという神の中世的変容が起るが、こうした院政期から中世における翁信仰の高まりが芸能の「翁」の成立につながるといえるのである。しかし、今までは、こうした総合的視点での翁研究は、ほとんどなされてこなかったと言っても過言ではない。

総合的に翁信仰を考える際には、金春禪竹の翁論も重要で、禪竹を中心におきながら翁猿樂が成立する背景としての翁信仰を考える必要がある。禪竹は、猿樂者の翁信仰について集中的に書いており、春日明神・住吉明神・天満天神・地藏菩薩など、いろいろな神や仏が翁と結びつき、一体であることを説く。そのなかでも、今回取り上げる住吉明神のケースは、古代から中世にかけての翁としての形象化のプロセスをもっとも良く資料的に残しているものとして注目される。

住吉明神は航海を掌る神、戦いに従う神である一方、人丸や玉津島の神とならんで和歌の三神とされ、和歌の守護神として崇められた。古代から中世を通じて、住吉明神ほど多

* 東京大学大学院博士課程（総合文化研究科）、立教大学日本学研究所特別研究員

様なあらわれ方をする神はほとんどみられないが、こうした流れをうけて、金春禪竹の翁論では、住吉明神の多様なありさまが翁と有機的關係で語られる。禪竹が翁を神祇信仰と結びつけて論じるなかで、眞先に住吉明神を取り上げ、翁が住吉明神と一体であることを語る理由はどこにあるのだろうか。住吉明神の翁の神としての形象化について探ると同時に、禪竹の翁論における住吉明神の位相を考えてみたい。

二、姿をあらわす神

『日本書紀』卷一神代紀によると、住吉明神は、伊弉諾尊が筑紫の櫛原で穢れを濯ぐために禊をした時に生まれたという、表筒男命・中筒男命・底筒男命の三神であるという¹⁾。また、神功紀においては、住吉神が「和魂は王身に服ひて壽命を守らむ。荒魂は先鋒として師船を導かむ」と託宣をし、住吉神が戦に従う神、航海を掌る神として登場する。こうした神話伝承は、住吉神が海を掌る神であったことをよくあらわしているが、『万葉集』のなかにも

大君の 命恐み さし並ぶ 國に出でますはしきやし 我が背の君を かけまくも ゆゆ
し恐し 住吉の 現人神 舟舳に うしはきたまひ 着きたまはむ 島の崎々 寄りたま
はむ 磯の崎々 荒き波 風にあはせず つつみなく 病あらせず 速けく 歸したまは
ね 本の國辺に

とあって、住吉の神に對して航海の安全を祈願する内容の歌が載っている。この卷第六、一〇二一番の歌には、「住吉の現人神」とあって、住吉明神が人の姿をとってあらわれる神であったことが記されているので注目される。古代においてはほとんどみられない「現人神」としての住吉神については、住吉大社の鎮座や縁起・神領などをめぐる古伝書『住吉大社神代記』²⁾にも次のような描寫がみえる。

- 1) また海の底に沈き濯ぎたまふ。因りて神を生みたまひ、号けて底津少童と曰す。次に底筒男命。又潮の中に潛き濯ぎたまふ。因りて神を生みたまひ、号けて中津少童命と曰す。次に中筒男命。又潮の上に浮き濯ぎたまふ。因りて神を生みたまひ、号けて表津少童命と曰す。次に表津少童命と曰す。次に表筒男命（中略）其の底筒男命・中筒男命・表筒男命は、是即ち住吉大神なり。
- 2) 本書の奥書には天平三年（七三二）の撰述とあるが、住吉大社に伝わる現存本は後に書寫されたものであるというのが通説である。書寫時期については、近年の田中卓氏の見解によると、延暦（七八九）頃とされる。

時に東の一大殿より扉を押開きて、大神、美麗貌人に表はれたまひ、白き笏を取り、闕を叩きて和へませる歌、

宇部麼佐仁、岐美波志良末世、賀美呂岐乃、比佐志岐余余里、伊波比曾女互岐（宜まきに、君は知らませ、神ろぎの、久しき世より、齋ひ初めてき）

縦容に交親して具に在しましき。「吾が和魂は常に皇身に厝き、常盤に堅磐に守り奉り、一切衆生の望み願を成就円満てむ。吾、万世この地に住まむ」とのりたまふ。³⁾

以上は、住吉に参詣した輕皇子の歌に對して住吉神が応答歌を詠む場面である。住吉神は、神殿の扉を押し開き「美麗貌人」、つまり、端正な姿であられ、久しい昔の世から君を守護してきたという内容の歌を詠んだ。さらに、皇子と親交し、常に皇身につき皇を守り奉るということを語る。このように『住吉大社神代記』なかで、住吉神があらわれ、輕皇子と歌を贈答したと書かれた以來、和歌文學史においては住吉神の顯現を記す伝承が多く書かれてきた。

一方、住吉明神の顯現が、珍しいことと認識されていたようなふしが『伊勢物語』にみえる。『伊勢物語』百十七段には、住吉の顯現を特別に「げぎょう」という詞で書いているのである。

昔、帝、住吉に行幸したまひけり。

われ見てもひさしくなりぬ住吉の岸の姫松いくよ経ぬらむ
おほん神、げぎやうしたまひて、

むつましと君はしら浪みづがきの久しき世よりいはひそめてき

以上には、帝が住吉に行幸して歌を詠んだら、「おほん神、げぎやうしたまひて」歌を返したとある。『伊勢物語愚見抄』によると、「げぎやうは現形にや。神体の顯れ給ふ心也」とあり、「げぎょう」は、神仏が姿をあらわしたことをさす言葉であると説明されている。『伊勢物語』に収録された住吉の返歌は上句に異同はあるものの、『住吉大社神代記』で詠まれた明神の歌とほぼ同様で、こうした歌の背景には、住吉神の「王權の守護神としての役割がよく示されている」⁴⁾といえる。天皇や皇子が住吉に参詣し、住吉明神と歌を贈答するという伝承は少なくないが、こうした歌や伝承には、住吉明神の王權の守護神としての性格が表れている一方、後代に住吉神が和歌の神として祭られるようになる状況がすでにできあがっていたことを示唆するのであろう。このように、住吉明神が人の前に姿を示現させたという伝承は、和歌の世界と関係深い。特に『伊勢物語』成立以來、歌道の各流派にお

3) 田中卓史の『住吉大社神代記の研究』（図書刊行會、一九八五）に収録された訓讀文による。

4) 多田一臣「須磨・明石巻の基底—住吉明神をめぐる—」、『文學史上の源氏物語』至文堂、一九九八

いて、「天皇の住吉參詣の伝が特に重視され、異伝が多く生まれる」⁵⁾なかで、人間の姿としてあらわれる住吉神像が具体的に描寫され始めた。

住吉明神は、童子としてあらわれる場合と翁の姿をとってあらわれる場合の二つがある。まず、『古今和歌集序聞書』に書かれた文徳天皇の住吉參詣伝には、天安元年正月二十八日文徳天皇が住吉に行幸した際、隨行した業平が住吉明神に歌一首を奉ると、住吉神が

玉のとぼそを押し開き、赤衣の童子と現じて

と、赤い衣を着た童子の姿をとってあらわれ、返歌を詠んだのである。古今注の秘伝書『玉伝深秘卷』所収「阿古根浦口伝」にも同様の文徳天皇住吉參詣譚が載っている。文徳天皇に隨行した業平が、住吉明神に歌を奉り、社壇に近づいて御戸をおしひらいて見奉れば、「赤衣の童子一人出現して御返歌」があった。また、『玉伝集和歌最頂』『玉伝事』にも、兩秘伝書と共通する住吉明神の「赤衣の童子」示現譚の伝承がみられる。

以上は、住吉明神が童子として形象された伝承であったが、その一方、住吉明神をめぐっては老翁としてあらわれるという伝承が多い。住吉明神が翁の姿をとってあらわれる一番早い例が、十一世紀半ばの成立とされる『赤染衛門集』にみえる。『赤染衛門集』には、住吉神に奉った歌三首と、それに關する注が次のように書かれている。

たのみては久しくぬ住吉のまづこのたびのしるしみせてよ
千世へよとまだみどりごにありしよりただ住吉の松を祈りき
かはらむといの命は惜しからで別るとおもはん程ぞかなしき
奉りての夜、人の夢に、ひげいとしろき翁、このみてぐら三つながらとるとみて、おこたりにき。

この三首の歌と左注は、住吉明神の和歌の神としての靈驗をもっともよく示している例である。そこに、住吉神が「ひげいとしろき翁」として人の夢にあらわれたとあるのである。この歌三首は順序を変えて藤原清輔の『袋草紙』にも引かれる。その注にあたる部分にも「人の夢に、白鬚の老翁社中より出で来てこの幣を取りて入り了んぬ」とある。人の夢にあらわれた白鬚の老翁が住吉神の化現だったのであり、これと同じ内容が『十訓抄』にも引かれている。

翁の住吉神は、『古今和歌集』や『伊勢物語』などの古注釋・歌學秘伝の世界でも、大いに活躍している。とりわけ、鎌倉時代の成立とされる能基『古今和歌集序聞書』には、源大納言経信卿が住吉へ參籠し、明神に和歌の不審を祈請すること三七日が過ぎないうちのある

5) 三輪正胤『歌學秘伝の研究』風間書房、一九九四、一七六頁

夜、一人の老翁があらわれたとある。つづいて、老翁は、七日に及んで経信と問答を行ったが、その正体は「明神の化現」であったという⁶⁾。『古今和歌集序聞書』において、住吉明神が童子としてあらわれることについては、前にもふれたが、その一方、住吉神が翁の形象をとってあらわれたのである。このように、中世における住吉神は、翁と童子として出現するという錯綜する思想のなかで語られたのである。

秘伝書『三五記』には、経信卿が住吉に参籠したある日の夜、夢の中に烏帽子を着た老翁の住吉神が出現したとある。

年はや九九にも余りたらむとおぼしき老翁の、赤地の錦の帽子に白拂をかなでて、神殿の御前に打ちうそぶきたる氣色にて座し給へりける⁷⁾

『阿古根浦口伝』でも、住吉神が

今我赤衣は汝にしめす姿也。我がは八旬の幽翁たり。その形を人にかたどる事勿れ⁸⁾

といい、阿古根浦の口伝の謂れを説く。

『伊勢物語知顯集』では、住吉神が「あやしき翁」として住吉の浜辺にあらわれ、『伊勢物語』の奥義を語る。その翁の年は百歳ばかり、鬢髯が月光とあらそうほど白く光っていたという。そして、その格好は、

しろきすいかん。ふるびたるくずのはかまのこしかたやふれかゝりたるをきて。ゑぼしをみゝぎはにさきいれたり。としのほどもあはれに⁹⁾

6) 問家隆は俊成の弟子、俊成は定家の父也。何ぞ家隆の流とて別に可有哉。

答、俊成没後に定家・家隆は左右の翅。雖然、家隆は定家の末を受たるに依て一義を成する事不能。爰に、帥源大納言経信卿住吉へ参籠有て大明神に和歌の不審を祈請す。三七日満ずる夜、住の江の月隈なかりける夜、老翁出現して経信に向て「何事を祈精し給ふぞ」と問玉。答て云、「吾に鳥羽の帝より、哥に七の大事と云事を尋させ給ふ。是諸家の人に非可尋。仍て、大明神に此事を祈請す」と申さる。翁の云、「何程の大事か承り給らん」と云。経信一々に不審を申す。翁聞きて「安き理の事也。明神の御託宣を待に不及」とて七夜がほどに不審を聞き開かす。是を経信註して十二帖にして書付。六卷をば鳥風問答神頭風伝と云。今六卷をば知顯と名づく。今此翁は明神の化現也。家隆、定家に義を違へんために彼風伝を尋で、此義に付て、定家の流に義をかへ文字讀をかへて二つの流とす。然れども経信より血脉相承なきにより当流には家隆を吾家の末の物と号す。故に、定家には、やまとうたと云。家隆には、やまとうたと讀也。草紙を書くに、二つのかはりめあり。定家には一丁を引返して紙の端より書、外題を中に書。家隆には一丁を引返して閉目より書、外題を端に書也。（『中世古今集注釋書解題』二）

7) 『日本歌學大系』第四卷

8) 『日本歌學大系』第四卷

9) 『續群書類從』十八卷

とあるように、みすばらしい翁であった。一方、『申樂談儀』で「住吉遷宮の能」とよばれる曲は、謠物「葛の袴」を後段とし、前段を付加してつくりあげられた能とされるが¹⁰⁾、「葛の袴」は『伊勢物語知顯集』の本文によっており、ここでの下品な翁の住吉明神像が「葛の袴」へと受け継がれている。即ち、世阿弥の『五音』にみえる「葛の袴」に登場する住吉神は、

その姿を見るに、霜雪かしらに重なて、鬢髪に黒き筋なし、波浪額にたゞんで、面貌しきりに皺めり、高睨と〔まかぶら〕高に、醜陋にして〔みにく〕、白き水干の、古く赤み果てたるに、葛の袴のこゝかしこ破れ損じたりけるに、錆色の立烏帽子を耳の際に引き入、うそぶき月に向かえば、せいしつものゆうゆうたるをあけては、きちべうにはれ、てうちのかんかんとるをくだきて、うんてんはんのをさまる。尉に是を怪しめて、この物語の不審を、少々尋ぬれば、此翁齒もなき口を廣らかに打ち笑みて、

と描寫される。白髪に高くのびたまぶたで皺だらけの顔が醜く、色あせた水干に破れた葛の袴、さびた色の立烏帽子の、下賤な姿であった。特に、齒もない口を廣げて笑うという表情の住吉神像は、翁舞を舞う翁の姿に近いものがある。翁猿樂に出てくる翁も、高貴な老人というよりは、笑みを浮かべた庶民の老人を連想させるからである。

本朝古今の説話をあつめた『古今著聞集』（五卷）にも翁の住吉神顯現譚がみられる。嘉応二年十月九日の住吉歌合で詠まれた秀歌に感応し、難破から舟を救ったという話である。藤原實定の詠んだ「ふりにける松ものいはゞ問てましむかしもかくや住江の月」という歌は、伴者藤原俊成を始めとし世の人々が褒めるくらいの優れた和歌であったが、この歌に感応した住吉明神が神威をあらわしたというのである。その様子が次のように述べられる。

その比かの家領、筑紫瀬高庄の年貢つみたりける船、攝津國をいらんとしける時、惡風にあひて、すでに入海せんとしけるとき、いづくよりかきたりけん、翁一人いできて、こぎなをして別事なかりけり。船人あやしみ思ふほどに、翁のいひけるは、「松ものいはばの御句のおもしろう候ひて、この辺に住み侍る翁の参りつと申せ」といひて失せにけり。

年貢船が沈みそうだった時、どこからか一人の翁が出てきて、助けてくれたが、この翁が住吉神であった。この條の末尾には、「住吉大明神のかの歌を感ぜさせ給ひて、御体をあらはし給ひけるにや。不思議にあらたなる事かな」とあるように、住吉神が歌に感応して姿をあらわすという靈驗譚は、赤染衛門が歌三首を奉った時に、翁姿の住吉神が現示し、神威をみせたという伝承とも共通する。『古今著聞集』の伝承では、翁の住吉神が沈没しそうな船を助けたとあり、そこには、住吉神の海の神としての性格も表れているよ

10) 田口和夫『能・狂言研究』三弥井書店、一九九七、一六四～一七八頁

うに思われる。一方、『古今著聞集』の同箇所¹¹⁾の記録によると、住吉明神を感銘させた歌が、俊成が判者をつとめた歌合わせで詠まれた歌となっている。このように、住吉神示現に關する伝承が、藤原俊成の和歌サークルのなかで發生してくることが、注目される。三輪正胤氏の指摘¹¹⁾によると、俊成は、新たな歌學の相伝關係において、積極的に神を取り込んでいたようであるという。すなわち、俊成が『千載和歌集』を勅撰した際、自ら記した序文の末尾を「この集、かくこの度、記しおかれぬれば、住吉の松の風久しく伝はり、玉津島の波永く靜かにして、千々の春秋を送り、世々の星霜を重ねざらめや」と止めているが、この文を取り上げて次のような解釋をしている。『千載和歌集』に選ばれた歌が、住吉の松・玉津島の波の如く永遠であることを願っているわけで、それは結局のところ、住吉・玉津島の兩神が和歌を守護する神であることを認めての發言である。そして、こうした『千載和歌集』の表現が、住吉と玉津島の兩神を和歌の守護神と見る公的な發言であると指摘しているのである。さらに、三輪氏は、『古來風体抄』を取り上げ、俊成が住吉と玉津島の兩神への尊崇の念が極めた強かったと力説している。こうした住吉神に對する俊成の信仰が背景にあって、『古今著聞集』の住吉明神靈驗譚が成立してくるのではないだろうか。住吉神が和歌の守護神として、確固たる位置を持するようになったのは、俊成のような歌人の信仰心が直接的な要因としてはたらいっているのであろう。

三、赤い衣を纏う住吉明神

住吉明神があらわれる時は、しばしば赤い衣を身に纏っている。住吉明神の童子示現説には、「赤衣の童子」という表現が多く、歌學秘伝書の世界には、赤衣の童子の形象が廣く流布していった。前に取り上げた『古今和歌集序聞書』をはじめ歌學秘伝の世界で、住吉神が赤い衣を着た童子として出現する。

一方、『阿古根浦口伝』には、住吉明神が八旬の翁で、赤衣の姿を人に示していた。また、『三五記』では、住吉神が赤地の錦の烏帽子を着ていたとあり、住吉明神が身に纏うものとして赤い色が強調されている。住吉神が赤い衣を着た翁であられるという伝承の發生を追求するとき、大陸から渡來した赤山明神の示現譚が想起される。『源平盛衰記』卷十には、赤山明神の示現譚が次のように記されている。

賢聖の障子のあなたに、赤衣の裝束したる老翁あり。左の脇に弓を挾て、大なるをさらりさらりと爪よると聞し召しければ、驚き思し召して誰人ぞと御尋ね有けるに、我は是れ比

11) 三輪正胤『歌學秘伝の研究』風間書房、一九九四、一八頁～二十三頁

叡山の西の麓に侍る老翁也。世には赤山とぞ申し侍る。

赤衣の装束をした翁は、赤山明神であった。比叡山鎮守の護法神である赤山明神は、慈覺大師の入唐求法に由來する渡來神であるが、本來は、唐の赤山法華院において祀られていた山神であった。こうした赤山明神の由來が、貞応二年（一二二三）に成立した『日吉山王利生記』の

赤山と申は、慈覺大師大唐より伝法歸朝の時、飄風浪をあげ舟楫海にしづみむべかりければ。本山に向ひて護法山王を念じ奉られけるに。不動毘沙門舟のへに顯れ給のみならず。赤衣の俗白羽の矢を負て出現せり。是は震旦國赤山と云山の明神なり。本地は泰山府君にて御す。大師歸朝ののち。叡山の西坂本にぞ勸請せられける

と、語られる。慈覺大師歸朝の際、波風で舟が沈みそうになり、赤山に向かって護法山王を念じ奉ったら、舟の舳に赤衣の赤山明神が出現したという。赤山明神が赤衣に矢を負って出現している姿は、『源平盛衰記』で赤山明神が赤衣の装束で弓矢を携えている描寫と類似している。さらに、『古今著聞集』に収録された住吉神が沈没しそうになった舟を助けたという伝承とも共通する。住吉神が秀歌に感應し、難破から舟を救ったという話が収録されている『古今著聞集』の記事については、前にも言及したとおりであるが、悪風に遭い、遭難しそうになった舟に一人の翁があらわれて助けるというくだりが、本書における赤山明神の示現譚と似通っているのである。また、赤山明神が弓矢を持ってあらわれるのは、住吉神が神宮皇后の出陣に従った軍神とされる点でも共通する。このように、赤山明神と住吉神は、伝説における出現の仕方が似ているのであり、住吉神が赤衣の姿であられるのも、伝承上の緊密な繋がりに起因しているのではないだろうか。

翁の住吉明神の顯現が最初に語られたのは、『赤染衛門集』であった。赤染衛門が住吉神に祈願を込めて和歌を奉ると、神が奇特を現したが、こうした和歌伝承のなかに翁の住吉神の示現譚が取り入れられたのである。赤染衛門の祖先は、渡來系の「秦氏と同族、または同一の生活集団を形成した氏族」¹²⁾とされる。渡來の秦氏集団は、日本古代の神祇信仰に密着していた氏族であるが、特に、八幡・稻荷・松尾など翁の形象をもつ神の祭祀に携った例が多く、翁信仰と密接に関わっていたといえる。『赤染衛門集』に翁の住吉神の顯現譚が記される経緯も、渡來の秦氏や赤染氏族の間で持ち伝えられてきた翁神の伝承がモチーフとなった可能性があるだろう。

一方では、このような住吉神をめぐる赤い衣の問題が、渡來系赤染氏の職業ともリンクしてくると思われるので興味深い。古代の赤染部は、紅藍の染色に従事していた職業部で

12) 平野邦雄「秦氏の研究（一）」『史學雜誌』七〇—三、三九頁

あった。赤色は「本來靈威の宿ることを表す」¹³⁾とされる。また、赤は不浄や邪氣を拂う呪力をもつ色であり、赤く染めるということには呪術的意図がこめられていた¹⁴⁾ということなどがしばしばいわれてきた。次に取上げるいくつかの神話伝承は、赤・朱・丹が呪能をもつ色であったことをよく表している。まずは、三輪山伝説にみられる、赤土と關わる伝承である。『古事記』に收められている三輪山伝説は、玉依毘賣のところ突然秀麗な男が通いはじめてまもなく身籠ったので、その男の正体を知るために糸を裾に刺して後を追ってみると、三輪山の社で行き止まりになっていたという内容である。玉依姫は三輪山の神の子を身籠ったのである。この話の中に、「赤土を床の前に散らし、閑蘇紡麻を針に貫きて、其の衣の裾に刺す」とあり、赤土を床に散らすことが、ある種の靈威を發揮するための呪術的方法であったことがわかる。玉依姫の聖婚をめぐるもう一つの伝説が、『本朝月令』所引『秦氏本系帳』に載る「丹塗矢」の伝承である。つまり、

曰二玉依日賣一於二石川瀬見小川一遊爲時。丹塗矢自二川上一流下。乃取挿置二床辺一遂感孕生二男子一

とあり、玉依姫が小川で遊んでいた時、川上から丹塗矢が流れてきたので、それを取って床の辺に挿しておいたら、孕み男子を産んだというのである。天孫を授けるための媒体として用いられた矢が丹の色に塗られていたことも、赤色が神聖で呪力を持っていることを表す好例なのである。このような丹塗矢伝説とまったく同様な説話が、渡來集團秦氏が祀っていた松尾神をめぐる縁起のなかでも語られている。つまり、『本朝月令』所引『秦氏本系帳』には、松尾神が丹塗矢と化して川をくだってきたとし、秦氏の女と通じて男子を生んだという神婚説話が伝わっているのである。このように、赤色の呪術性をめぐる伝承が渡來系の信仰伝承に出てくるということに注目される。

四、塩土老翁と古海人老翁

住吉明神は、童子の姿をとってあらわれる場合もあったが、文學・信仰關係の伝承や美術の世界において、翁として描かれる場合が圧倒的に多い。こうした翁の住吉明神が形象化される過程には、どういう要素がはたらきかけていたのだろうか。それを考える時、「塩土老翁」や「古海人老父」といった住吉信仰の圏内で活躍する翁伝承との關わりを看過す

13) 三品彰英『増補日鮮神話伝説の研究』平凡社、一九七二、一三六頁

14) 松村武雄『日本神話の研究』第四卷（培風館、一九五四）、平野邦雄「秦氏の研究（一）」（『史學雜誌』七〇—三）など。

ることはできないだろう。

塩土老翁は、古代を代表する神人的な翁として注目される。『日本書紀』では、火瓊瓊杵尊の降臨譚と山幸海幸説話・神武東征の神話と絡んで塩土老翁の伝承が語られる。そのなかで、塩土老翁は、土着の守護神である國つ神とされ、天降った天孫に國を譲る。そして、天と地、天と海の世界を結び付け、道案内の役をつとめる。まず、『日本書紀』神代下第九段（一書第四）の塩土老翁の天孫への國譲り譚からあげてみる。

高皇産靈尊、的床覆衾を以ちて、皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊にせまつり、則ち天磐戸を引開け、天八重雲を併分けて、降し奉る。（中略）吾田の長屋の笠沙の御碕に至ります。時に彼處に一神有り、名は事勝國勝長狹と曰ふ。故、天孫、其の神に問ひて曰はく、「國左りや」とのたまふ。對へて曰さく、「在り」とまをす。因りて曰さく、「勅の隨に奉らむ」とまをす。故、天孫彼處に留在りたまふ。其の事勝國勝神は、是伊弉諾尊の子なり。亦の名は塩土老翁。

眞床覆衾あ（まところおふすま）に包まれ天降った天津彦彦火瓊瓊杵尊が、笠沙の御碕で出會ったのは、事勝國勝長狹ともいわれる塩土老翁であった。塩土老翁は「勅の隨に奉らむ」といい、吾田の長屋の笠沙は天孫火瓊瓊杵尊に譲られた。書紀の一書には、天津彦彦火瓊瓊杵尊と塩土老翁の応答を記すなかで、「是は長狹に住む國なり、然れども今は乃ち天孫に奉る」¹⁵⁾ある。ここには、塩土老翁が吾田の笠沙の土地を支配していた神であり、支配してきた土地を自ら天孫に奉ったことが、より明確に記されている。すなわち、塩土老翁の地主神としての性格がはっきりと語られているのである。

次に、海幸・山幸の説話と一緒に語られる塩土老翁譚である。海幸と山幸は、海と山の幸を得る靈力を持っていた兄弟であるが、ある日、試しに幸を得る道具の釣針と弓矢を交換してみた。ところが、どちらも獲物を得ることができず、兄の海幸は後悔して弟山幸に弓矢を返し、自分の釣針を返すようにと求めた、山幸は、すでに釣針を無くしてしまったので、たくさんの新しい釣針を作って与えるが、海幸は元の釣針でないと受けとらないという。そのため海辺に行って嘆息していた山幸の前に、忽然と塩土老翁があらわれた。

時に一の長老有り、忽然に到り、自ら塩土老翁と称る。乃ち問ひて曰さく、「君は是誰者ぞ。何の故にか此處に患へます」とまをす。彦火出見尊、具に其の事を言ふ。老翁の曰さく、即ち囊中の玄櫛を取り地に投げしかば、五百箇竹林に化成りぬ。因りて其の竹を取り、大目麤籠に作り、火火出尊を籠の中に内れ、海に投る。（中略）時に、海底に自づからに可憐小汀有り。乃ち汀の尋に進みます。忽に海神豊玉彦の宮に到ります。

15) 『日本書紀』神代下、第九段一書第六

以上の『日本書紀』神代下第十段（一書第一）によると、彦火火出見尊、すなわち山幸は、塩土老翁の作った籠に入れられ海底の海神豊玉彦の宮に到る。すなわち、塩土老翁は、山幸を海宮へと導く海路の案内者であった。續いて、彦火火出見尊が海神豊玉彦の娘である豊玉姫と結婚し、しばらく海宮に留まることになる。やがて三年の年月が過ぎ、無くしていた兄の釣針を取り戻し陸へと歸る。

三番目にあげる塩土老翁譚は、神武東征の神話と絡んで語られる。神武天皇即位前紀によると、彦火火出見、すなわち後の神武天皇が大和を志向し、東征に赴く決断は塩土老翁の教えによってなされる。

塩土老翁に聞きき、曰ししく、『東に美地有り。青山四周れり。其の中に、亦天磐船に乗りて飛び降る者有り』とまをしき。余謂ふに、彼の地は、必ず大業を恢め弘べ、天下に光宅るに足りぬべし。蓋し六合の中心か。厥の飛び降る者は、謂ふに是饒速日か。何ぞ就きて都つくらざらむやとのたまふ。

彦火火出見が塩土老翁に聞いてみたところ、東方に、四方を青山に囲まれた美しい國があることを教えられる。また、そこには、すでに天上界から天磐船に乗って降臨した者がいるという。以前から大和へ天降った饒速日命のことである。塩土老翁によい國を教えられた彦火火出見は、その國こそ大業を弘め、天下を治めるに足りるところであり、大和の中心の地であるといい、そこへ行き都として定めようと決めるのであった。この場合、塩土老翁は、新しい情報を提供し、王権をバックアップする土着の神であったと解することができよう。

以上の三つの伝承でみてきたよう、塩土老翁は、天津彦彦火瓊瓊杵尊に國を譲り、山幸を海宮に導き、彦火火出見に天下を治めるに適した土地を教える神であった。こうした塩土老翁と住吉明神が共に海を掌る神として共通し、さらに、同一神とされる説がしばしば述べられてきた。その早い例が、金春禪竹の書いた『明宿集』にみえる。『明宿集』には、翁の住吉神を塩土老翁と直接結び付ける論理が出されている。また、元祿頃の人物とされる梅園惟朝編著の『住吉松葉大記』にも、住吉明神と塩土老翁が一体と記されている¹⁶⁾。近年においては、田中卓氏が『住吉大社神代記』に「西國見丘在。東國見丘在。皆大神誨二天皇一賜、令二登塩筒老人見一國賜岳」とあるのをとりあげ、塩土老翁は住吉神の御使乃至現人神のように記されており、兩神が所伝の上で深く結びついていると説く。¹⁷⁾

16) 「塩土老翁は一名を事勝國勝長狹とも申す、是伊弉諾尊之子也と神代紀一書に見えたり。天孫瓊々杵尊初めて日向國高千穂峰に天降りて、都地を覓めさせ給ふ時にも、此塩土老翁神出現して土地を導き給へり。又神武天皇東征し給ふも此塩土老翁神也。凡そ此神は土地を恢め不通を開き、天下を富し帝位を守護する神也。当社大神と御徳を論する時、應に是一体也」(『住吉松葉大記』巻第四)

17) 田中卓『田中卓著作集一 神話と史實』図書刊行會、一九八七、二六四～二六五頁

『日本書紀』卷九、神功皇后による新羅外征の神話のなかでは、住吉神が、新羅を攻めるように託宣したとあり、出陣に際しては「和魂は王身に服ひて壽命を守り、荒魂は先鋒としてを導かむ」という神意が告げられる。和魂は、神功皇后の命を守り、荒魂は、先鋒となって船を導くとあるが、ここでは、住吉神が軍船を導き、戦に従う神として描かれている。また、新羅からの歸途には、住吉神のお告げにより、荒魂を穴門の山田邑に祭ったとある。和魂に関しては、「大津の淳中倉の長狭に居さしむべし。便ち因りて往來船を看さむ」とある。往來する船を見守るため、大津の淳中倉に鎮座させよという神のお告げがあったのであるが、ここには航海神としての神格がよくあらわれている。こうした住吉神は、塩土老翁が神武天皇に大和統一のためのよい地を教え、海の道を案内する役割と重なる。両者の間には、海神信仰としての類似性があり、無縁には思われぬ。住吉明神には、このような古代の塩土老翁の記憶が残されていたのではないだろうか。

一方、住吉信仰圏にいるもう一人の翁として古海人老父があげられる。古海人老父の伝承は、『住吉大社神代記』の「天平瓮を奉る本記」にみられる。

右、大神、昔皇后に誨へ奉りて詔り賜はく、「我をば、天香山の社の中の埴土を取り、天平瓮八十瓮を造作りて奉齋祀れ。又、覬覦る謀はらむ時にも、此の如く齋祀らば、必ずへむ。」と詔り賜ふ。古海人老父に田の蓑・笠・簔を着せ、醜き者として遣して土を取り、斯を以て大神を奉齋祀る。此れ即ち、爲賀悉利祝、古海人等なり。斯に天平瓮を造る。

住吉神の仰せにより、古海人老父に田の蓑・笠・簔を着せて、醜い翁として天香山に埴土をとってくるように遣わした。それをもって大神を奉齋した、とある。この説話は、『日本書紀』の神武天皇即位前紀のものが老翁・老嫗に変装し、天香山の土をとりに行く話と酷似し、その異伝とされている。『日本書紀』神武天皇即位前紀には、次のようにある。

夢に天神有りて訓へて曰はく、「天香山の社の中の土を取りて、天平瓮八十枚を造り、併せて嚴瓮を造りて、天神地祇を敬祭り、亦嚴呪詛をせよ。如此せば虜自づからに平伏ひなむ」とのたまふ。天皇、祇みて夢の訓えを承り、依りて行ひたまはむとす。（中略）乃ち椎根津彦に弊れたる衣服と蓑笠とを着せて老父の貌に爲らしめ、又弟猶に箕を被けて老嫗の貌に爲らしめ、勅して曰はく、「汝二人、天香山に至り、潛に其の巔の土を取りて來施るべし。其業の成否は、汝を以ちて占はむ。努力、慎め」とのたまふ。（中略）時に群虜二人を見て、大きに咲ひて曰、「大醜乎。老夫老嫗」といひて、則ち相與に道を闢りて行かむ。二人の人、其の山に至ること得て、土を取りて來歸る。

天神が神武天皇の夢に出てきて、敵を平伏させるため、天香山の社の中の土（はに）を取ってきて祭祀土器をつくり天神地祇を祭ると夢告する。そこで、神武天皇は、椎

根津彦と弟狷を老翁・老嫗に変装させ、天香山に遣わした。天香山の土をとってくることをもって大和平定の成功を占うということである。破れた衣服と蓑笠というみすばらしい格好の老父と老女に身を変えた二人を見て敵軍の兵士が大笑い、疑いなく道を開いてくれたので土をとってくることができた。天香山の土を盗み取ることに關しては、崇神紀十年九月に武埴安彦が謀反を企てた時の記事中にも「武埴安彦が妻吾田媛、密かに來りて、倭の香山の土を取りて、領巾の頭に裹みて祈みて曰さく、「是、倭國の物質とまうして、則ち反りぬ」とある。倭の香山の土を盗み取って「倭國の物質」だと呪詛したのであるが、新日本古典文學全集の頭注の指摘によると、香山の土は倭國の象徴ゆえ、これを盗むことは倭國を盗むことになるという。こうした伝承で取り上げられる土は、埴・赤土とも書くが、そこには靈力が含まれていたものとされ、香山の土を守ったり、盗んだりする伝承も、土そのものがもっている呪術的な力を背景において語られたのである。また、香山の土で天神地祇を祭祀するための土器を作ることは、香山の土が、もっとも強い呪力をもっていることを示すのであろう。

このように、蓑笠を來て醜い翁に変装する椎根津彦の伝承が『住吉大社神代記』においては古海人老父にとって変られたのであろう。後文によると、古海人老父は、住吉大社の末社である神社の祝人とある。『住吉大社神代記』には、座間神(一名、爲婆照神)は、住吉大神の御魂だという託宣をするとあるが¹⁸⁾、このように住吉信仰圏内で語られる醜い翁の伝承も後年住吉神が翁姿として現れるに際して重要な契機として作用しているのではないだろうか。

五、住吉明神と人丸

人丸は中世を通じて住吉明神と深く結びつくが、両者は翁の形象をもつ和歌の神という点で重なる。鎌倉時代の歌學書『竹園抄』の「和歌講作法」には、

其作法はまづ人丸を右にかけ、高貴住吉大明神を左にかくべし

とあり、對になった人丸と住吉明神が和歌の守護神として仰がれている。三輪正胤氏によると、人丸畫像が六條藤家の象徴として用いられており、これは、御子左家の俊成が住吉神や玉津島の神を和歌の守護神として積極的取り入れようとしていたのと對比されるといふ¹⁹⁾。このように兩家の和歌の守護神として活躍しながら、兩者の間には一体説が生まれ

18) 吾者住吉大神之御曾。爲婆天利神。亦猪加志利之託。仍神主津守宿禰齋。爲加志利津守連等奉仕。

19) 三輪正胤『歌學秘伝の研究』風間書房、一九九四

てくる。中世の古今注の秘伝のなかには、人丸を住吉明神の化現とする伝承が少なくない。とりわけ、古今注の秘伝書『玉伝深秘卷』には、住吉明神が翁の姿をとってあたわれ、人丸の分身であることを告げる。

ここに天武天皇住吉行幸の時、大明神老翁に形を現じて伝、歌道を世に廣めんために人丸に分身して侍り。しかるに、この道を弘めたまふべしと云々。御門御返事あらんとしたまふところに、かきけすやうにうせたまひぬ。その時、人丸分身ありける事分明なり。

つまり、住吉神が人丸と一体化されるわけだが、住吉神と人丸を結びつける際、住吉神→翁→人丸というふうには翁が媒介者となるという点は、翁神の問題を考える上で興味深い。中世の開山縁起や神社縁起のなかでも神仏が翁を媒介にして現れる場合はしばしばみられるのである。また、『古今秘哥集阿古根伝』所収「社頭風伝集」には、人丸と「ほのぼのとあかしの浦の朝霧に鳥隠れゆく船をしぞ思ふ」の歌をめぐる秘説が記されている。次は、そのなかで、人丸の本地を住吉神とする部分である。

實には、歌の灌頂と申は、人丸の御事能以知申也。或人云、是は持統天皇の御諱、天竺にて新蛮翁、唐にては東方朔也と云。(中略)人丸、本地住吉明神也。其故は弘法大師入唐の法施を參せ給ふ時、神と顯れ玉ひて示現有て、我は本覺の古仏也。人丸か身、只我なりと有ければ、御門に奏し玉ふ。然れば人丸の影を内裏清涼殿に被レ懸たりければ、五位にて有けるを三位に叙すと云へり。²⁰⁾

住吉明神と人丸の結びつきは、中世において一層強くなってきて、住吉明神・人丸一体説が作りあげられた。

こういった構想の淵源は、すでに源氏物語「須磨・明石」巻にあったのではなかったのだろうか。『源氏物語』の「須磨」・「明石」巻の基底に流れる住吉信仰をめぐるのは、今まで多くの指摘があった。須磨・明石の巻には、明石入道をはじめ厚い住吉信仰が描かれ、物語化されていることが知られている。特に、多田一臣氏が指摘²¹⁾するように、須磨巻の暴風雨は住吉明神の神異であり、それは住吉明神が荒人神と呼ばれたこととも無縁ではない、具体的な現れであったのだろう。『源氏物語』における暴風の神としての住吉明神の存在は、光源氏をバックアップする神であると同時に、荒神のあらわれ方を示している。

一方、このような物語の本筋を支えるものとして住吉信仰が具現化されたもう一つの例が、明石入道が住吉明神の夢告を受け、船を仕立てて源氏を迎えに行く場面²²⁾である。明

20) 岡見正雄編『室町ごろ 中世文學資料集』

21) 多田一臣「須磨・明石巻の基底—住吉明神をめぐる—」『文學史上の源氏物語』至文堂、一九九八

22) 渚に小さやかなる舟寄せて、人二三ばかり、この旅の御宿をさして來。何人ならむと問へば舟「明石

石を中心にした海岸一帯には住吉信仰が流布していたとされるので、住吉信仰により触発された物語の展開を見せるのは、自然にも思われるが、もう一つ、この場面には、人丸のイメージが影を落としていると考えられるので注目される。明石の浦より入道が船にのってやってくるという設定は、人丸の「ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島隠れゆく船をしぞ思ふ(いま旅先にあつて、ほのぼのと夜の明けころ、明石の浦は朝霧に包まれているが、一艘の小舟が島陰に隠れていくのを私はしみじみと眺めている)」という歌からヒントを得て語られているように思われる。平安時代以来、人々はこの歌を人丸の代表作だと思い込み、「ほのぼのとあかし…」という、人丸を思い浮かべていたようだが、住吉明神の守護というイメージと人丸のイメージが重なると同時に、人丸の歌の世界が具現化・物語化された部分だと思われるのである。また、明石巻には、源氏が明石の君へ送った歌に、「嘆きつつあかしのうらに朝霧のたつやと人を思ひやるかな」とあつて、人丸の「ほのぼのとあかし…」の歌を下敷きにしているとされるが、このように、『源氏物語』の須磨・明石の巻には住吉明神と人丸のイメージがからんでくるのであり、中世に住吉明神と人丸を一体とする説はすでに『源氏物語』の頃から一般化していたものではなかったのだろうか。

また、『玉伝深秘巻』は、住吉明神から業平に伝えられたという「玉伝」を始めとする和歌秘伝が収められているが、そのなかでは、住吉明神が人丸と結びつく一方、業平と一体とされる伝承が多く書かれる。

天命勢尊・國命尊、阿古根浦にて天降給ひし道伊女命・勢夫命、安智苑の海にして嫁して御子たちをうみて夫婦の道絶えずして人の命を継ぎ、しやうじて心をいさむる道なり。歌に云、

今こそは伊勢の契もはじめつれ伊勢の契は末ひさしかれしかるに、業平は住吉の化身、人丸の再誕といふこと、業平の歌に云、

我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよへぬらむ

この歌の心は、業平住吉の化現、しかれば、この浦に跡を垂れて幾代へてこの姫松を見つらんといへり。住吉大明神の御返歌に云、

むつましと君はしらなみづかきのひさしき世よりいはひそめてき

の浦より、前の守新發意の、御舟よそひて参れるなり。源少納言さぶらひたまはば、對面して事の心とり申さん」と言う。良清驚きて、「入道はかの國の得意にて、年ごろあひ語らひはべりつれど、私にいささかあひ恨むことはべりて、ことなる消息をだに通はさで、久しうなりはべりぬるを、浪の紛れにいかなることかあらむ」とおぼめく。君の、御夢なども思しあはすることもありて源「はや會へ」とのたまへば、舟に行きて會ひたり、さばかりはげしかりつる波風に、いつの間にか舟出しつらむと心得がたく思へり入「去ぬる朔日の夢に、さまことなる物の告げ知らすることはべりしかば、信じがたきことと思つたまへしかど、『十三日にあらたなるしるし見せむ。舟をよそひ設けて、かならず雨風止まばこの浦に寄せよ』とかねて示すことのはべりしかば、こころみに舟のよそひを設けて待ちばべりつれば、他の朝廷にも、夢を信じて國を助くるたぐひ多うはべりけるを、用るさせたまはぬまでも、このいましめの日を過ぐさず、このよしをつけ申侍らんとて(後略)

此歌の心は、汝、我化身なれば、本末のかはりこそあれ、むつましとはしらぬかといへる心なり。

このような業平と住吉明神の歌の贈答は、『伊勢物語』一一七段にあった帝の住吉參詣譚を踏まえて書かれたものである。『伊勢物語』は伝えてないが、業平は住吉明神の化身であり、人丸の再誕とされる。同書には、「明神・人丸・業平、三人一体」ともある。さらに、『玉伝深秘卷』所収「合身の事」には、

君とは誰人ぞや。答へていはく、聖武天皇なり。問云、人とは誰人ぞや。こてへていはく、人丸也。聖武天皇は住吉明神也。政途不調の政のために皇家に生まれたまふ。聖武また人丸と云々。しかれば明神化現し歌道を弘めたまふ。歌とは、我國の法なり。聖徳太子もすなわち住吉の化現なり。しかれば、すなはち三人一体なり。本地は薬師ともいへり。又は観音とも見えたり。自位を案ずるに、薬師は陀舍婦人、観音は宝応聖といへり。御子なり。されば薬師・観音は一体なり。よって二名をば出せる歟。人丸と御門と身合するといへるは、本地一体をいへり。秘すべし。

聖武天皇と人丸は住吉明神を本地とし、一体であるとされる。または、聖徳太子までも住吉明神の化現であるという。このように、古今注の秘伝のなかでは、住吉明神が人丸や聖武天皇・業平・聖徳太子と同体であるという。そして、姿をあらわす時には、翁の形象をとってあらわれる。こうした住吉明神の結びつきが、禪竹の『明宿集』における翁の住吉神のありかたと構想のうえで類似していると思われる。

六、結びにかえて－禪竹の翁論

今まで、住吉明神の翁の形象化が、通史的プロセスのなかでどういうふうに表示していたのかをみてきた。住吉明神は、神功皇后の新羅外征を託宣し、軍船を導き出陣に従う戦の神であったり、航海を掌る海の神であったり、一方では、人丸と一体とされる和歌の守護神として活躍していた。古代から中世を通じて、住吉明神ほど多様なあらわれ方をする翁の神は、ほとんどみられない。こうした住吉明神の多様性を総合的に考えたのが、禪竹であった。禪竹の翁論『明宿集』では、何よりも住吉明神を強く意識し、多種多様な住吉明神像を翁の多様性に当てはめていく。翁が塩土老翁や、和歌の守護神、人丸、軍神と一体であるとする所以は、すべてが住吉明神を媒介して説明されているのである。一方、禪竹が住吉明神を翁と結び付けて語る論理は、先にのべた『玉伝深秘卷』的思考との類似している

といえる。

住吉明神をパイプとして、翁がいろいろな神と柔軟に結びつくなかで、まずは、和歌の守護神に重ねるのは、禪竹が「和歌はこれ猿樂の命と尊むべし」といっているように、和歌が猿樂においてもっとも重要な要素であるからであろう。『明宿集』の住吉に祈請することについて説く條には、

抑、彼御影の事を祈り奉は、伊勢・春日へも祈り申さで、住吉に申たてまつる事、分きて意趣あり。此神は、もとより翁御一体の上に、和歌の守護神にてまませり。

とある。翁の御影のことをお祈り申し上げるにあつて、伊勢・春日ではなく、住吉にお祈り申し上げたのは、特別な理由があるが、それは、住吉明神がもとより翁と一体のうえに和歌の守護神であるからであるというのである。翁は住吉明神と一体であるので、和歌の守護神とも繋がるという原理である。同條には、もう一箇所に翁の「御影」についての言及が

この心冥慮に通じけるか、すなわち靈夢を蒙りて、御影を披き奉事、証所隠れなき物歟。

とみえる。和歌を重んじる気持ちが住吉明神の心に通じたのか、靈夢を蒙って、御影を書き寫し礼拝したといひ、これこそ、明神に心が通じたという証據であるというのである。こうした翁の御影に関する記述は、人丸影供の起源譚ともよく似ている。つまり、藤原兼房が柿本人丸のことを強く念じていたある夜、高齢の高貴な人丸が現れる夢をみるが、夢が覺めてからその繪像を書かせ、常に拝礼したら、ご利益があったというのである。禪竹は、和歌の守護神として住吉明神をあげ、翁と結びつける一方、翁・人丸一体説も提唱する。住吉祈請の事に續く「人丸同一體の御事」と始まる條では、人丸について「御姿も翁に等しくまませり」といひ、翁の姿で畫かれる人丸影像を強く意識していることがみてとれる。

次は、翁を軍神とする説である。

翁は、軍神にてまします事、分明也。まず住吉は、和歌の實體にてましましてながら、神功皇后の御宇にわ異國を攻め給しこと、此神の威力他に異なり。それよりこのかた、異國降伏の御ために、西に向かい給へり、君徳の恵み淺からずして、末世の今、頼もしくこそ崇めたてまつれ。されば、翁を軍神とも申たてまつる也。從ひて、東國の武士わこの心を存智せる歟、鎧唐櫃に一面づつ、奉レ入とうけ給る。意趣委可れ尋。

住吉明神が神功皇后新羅外征を託宣し、出陣に従ひ、軍船を守る神であったことは、記

紀神話に詳しく記されている。禪竹は、記紀神話の神功皇后譚を忠實に踏まえ、住吉明神の軍神としての性格を翁の神格として轉換させているのである。特に、東國の武士が「鎧唐櫃に一面づつ、奉レ入」と、翁の顔を書き寫したものを一枚ずつ身に付けることの意味は、翁こそ軍人の守り神であることを強調しているのである。

このように、住吉明神を回路にして翁が神祇と繋がっていくのであるが、他方、芸能的翁の起源と深く関わってくるのが、翁と塩土老翁の一体説である。禪竹の『明宿集』では、翁の妙體として住吉明神が眞っ先に置かれ、それと位相を同じくする神として塩土老翁が直接に結びついてあげられる。

そのかみ、天神七代の末、地神第四火々出見の尊、御兄の火進之尊と、山の幸、海の幸をたがひに違え、慣らわぬ釣を垂れ給ふとて、針を魚に食われ給いし時、兄の尊せちに責め給えば、海辺に嘆き給ふ。その時、塩土の翁出現して、荒目の大龍を作り、龍宮に送りたてまつる。ついに釣針を取り返し、兄の尊に返し給いて、國土の主となり給ふ。その時の塩土の翁と申すわ、すなわちこの妙神にてまします也。しかれば、かみ神代を兼ね、しも人王の末を導き給ふ。すなわち天地の媒たり。この外、日本紀に見ゆる所、たやすく申すに及ばず。

禪竹は、記紀神話の山幸彦・海幸彦説話のなかに登場する塩土老翁を翁と一体であると述べる。塩土老翁が、土着の守護神である國つ神として天降った天神に國を譲り、天と地を結び、神武東征を導くなどの道案内の役をつとめる翁であることについては、前にもふれたとおりである。禪竹が、塩土老翁について「かみ神代を兼ね、しも人王の末を導き給ふ。すなわち天地の媒たり」と語るくだりは、こうした記紀神話の世界が伝える塩土老翁譚を踏まえてからの記述であろう。禪竹が翁を塩土老翁と引き合わせる理由の一つは、住吉明神が多様な神格を持っていたように、塩土老翁もいろいろな方向へと轉換する性格を持っていたからであろう。

一方、山幸彦・海幸彦説話は、隼人舞の起源伝承であり、そこに登場する塩土老翁が、芸能的翁と近い存在として考えられたかもしれない。禪竹が、山幸彦・海幸彦説話をとりあげ、翁の根源を説こうとした理由は、山幸彦・海幸彦神話が、服屬芸能である隼人舞の起源説話であったからではないだろうか。隼人舞は、隼人の祖先である海幸彦が山幸への服従を誓い、そのあかしとして滑稽な物真似をしてみせたことに由来する。大和民族は、國內統一を進め、大和政權を確立するなかで、各地の服屬部民の芸能を朝廷の儀礼として積極的に取り入れた。その代表的なのが隼人舞であったのである。服屬芸能の宮廷儀式化をめぐるのは、松村武雄氏の『日本神話の研究』のなかで、大和民族は、蝦夷・隼人・國栖の衆族などの異民族には呪的能力があると信じ、彼等の所有する呪的な力能を儀礼的に利

用し、邪靈や災いから政權を守護しようとした²³⁾と論じる。言い換えれば、征服された部族の芸能が儀式化される背景には、各部族がもっていた芸能の呪力を借りて中央政權の安泰を守ろうとする意図があったのだといえる。こうした滑稽な物真似演技の背景には、権力者側から笑われることが前提となっており、服屬する方が演じる滑稽な物真似とそれに伴う笑いは、猿樂が滑稽な物真似をするということと深く結びついているにちがいない。松岡心平氏は、征服された異民族が服従を誓う芸能を捧げ、それが海幸山幸伝説のような古代神話に投影されるが、捧げられた芸能の内容が模寫的演技であったことに注目されると指摘する。それは、日本の芸能にあっては、模寫的演技を担う者の周縁性の問題が、古代に發して現代に至るまで流れているからであるという²⁴⁾。古代においても服屬者が演じる滑稽な物真似は、穢れをはらうという意味合いをもって行われていたのであり、それが王權の擁護へとつながるものであった。天皇の對極にいる服屬者がその芸能でもって王權を壽ぐことが、猿樂集團のあり方と重なるのではないだろうか。猿樂者が笑わせるということで祝福するという芸能のあり方の原型が、隼人舞のような服屬芸能にあったのである。

さらに、古代において朝廷の儀礼に芸能をもって參勤していた服屬部民と中世の猿樂者の間には、意外な共通点がある。中世の猿樂の群は、境界的な存在であったが、中央からみる服屬者の場合も、常に異類や異界のものとして表象されてきたのである。大和政權が、中央政府に服従しない土着の異族に對し「土蜘蛛」というような賤称で呼んでいたことが、記紀や各地の風土記の逸文によって知られる。その土蜘蛛に關して、『常陸國風土記』に「普く土窟を置け掘り、常に穴に居み、人の來るあらば、すなはち窟に入りて竄れ、その人去らば、更郊に出でて遊べり。狼の性、梟の情ありて、鼠のごと窺ひ狗のごと盜む」とあるのは、彼らの習俗を動物に比喻し輕蔑していることとみられる。これは、東北の部族國家エミシに「蝦夷」の文字を当てることにも通じるのであろう。あるいは、『古事記』に「尾生る土雲」とあり、神武即位前紀に「身短くして手足長く、侏儒と相類へなり」とあるのをみると、土蜘蛛といわれる土着民の風貌が大和民族とは異様の存在とされていたことがわかる。『古事記』に、吉野國栖人の祖とされる國つ神の石押分之子にも尾が生えていたと伝承されるが、こうしてみると、服屬芸能をもって參勤していた部族の大体は、大和民族からみて、異様な種族であり、異界のものとして捉えられていたと考えられる。禪竹は、隼人舞のような服屬芸能や大和民族からみて異界の衆族という關係に、猿樂集團のあり方を照らしていたに違いない。

以上でみてきたように塩土老翁は、芸能的翁に近い存在ではあるが、塩土老翁自体は物まねをしない。これは住吉神の場合も同じだが、禪竹は、住吉神を塩土老翁と結びつける

23) 村松武雄『日本神話の研究』第一卷、培風館、一九五四

24) 松岡心平「物真似」『國文學』第四十卷九号、學登社

一方、演劇の起源の翁と同体として持ち上げている。その背景には、住吉神の一側面としての醜い翁がいて、それを回路に演劇の起源にいる翁とつながるということがあるのではないだろうか。前にも述べたように、住吉信仰圏内では、古海人老父の醜い翁の伝承が伝えられている。繰り返しになるが、『住吉大社神代記』の「天平瓮を奉る本記」に、住吉神が「天香山の社の中の埴土を取り、天平瓮八十瓮を造作りて奉齋祀れ」と仰せ、「古海人老父に田の蓑・笠・簔を着せ、醜き者として遣して土を取り、斯を以て大神を奉齋祀る」とある。この説話は、椎根津彦と弟猾が老翁・老嫗に変装して天香山の土をとりに行くという、『日本書紀』の神武天皇即位前紀の椎根津彦の醜い翁としての変装譚と同じ語り口であった。蓑笠を来て醜い翁に変装する椎根津彦の伝承がここにおいては古海人老父にとって変られたのであろう。

『日本書紀』は、椎根津彦が國神としてあらわれる際、塩土老翁のように翁の姿をとることについては、明記していないが、椎根津彦が蓑笠を着せられ翁に変装するくだりは、翁神の本質の始原を語るものとして注目される。椎根津彦が醜い翁として変装し、翁を演じるのは、演技の起源を語るものであり、古海人老夫もこれと同質に考えられる。住吉信仰圏に古海人老父が出てきて、そこに翁神の本質が含まれており、だからこそ住吉社が演技の起源に繋がるのであろう。金春禪竹が住吉神を演劇の起源の翁と同体として持ち上げる理由は、演技の起りといえる醜い翁としての変装説と直裁に関わっているのではないだろうか。

【参考文献】

- ・平野邦雄「秦氏の研究（一）」『史學雜誌』七〇—三 25-46頁
- ・松岡心平「物真似」『國文學』第四十卷九号、學登社 18-35頁
- ・多田一臣(1998)「須磨・明石巻の基底—住吉明神をめぐる—」『文學史上の源氏物語』至文堂 22-37頁
- ・田中卓史(1985)『住吉大社神代記の研究』図書刊行會 228-338頁
- ・三輪正胤(1994)『歌學秘伝の研究』風間書房 33-183頁
- ・田口和夫(1997)『能・狂言研究』三弥井書店 164-181頁
- ・三品彰英(1972)『増補日鮮神話伝説の研究』平凡社 55-100頁
- ・村松武雄(1954)『日本神話の研究』第一卷、培風館 27-51頁

要旨

中世の翁信仰を考えるためには、金春禪竹の翁論『明宿集』という書物が重要である。禪竹の翁論では、翁が様々な神々と結びつきながら、その實體を明らかにすることがない。そのなかでも、禪竹は、眞先に住吉明神を取り上げ、翁が住吉明神と一体であることを強く語り、住吉明神を重んじる。住吉明神が『明宿集』のなかでどういうふうにかかれて書かれているのかを考えることは、禪竹の翁論を考える切り口となるだろう。住吉明神は、神功皇后による新羅外征の神話では、戦いに従う神、航海をつかさどる神として登場する。一方、住吉明神は、人丸や玉津島の神とならんで、和歌の三神とされるなど、和歌の守護神として崇められた。『住吉大社神代記』には、住吉明神があらわれ、輕皇子と歌を贈答したと書かれているが、それ以来、和歌文學史においては住吉明神の顯現を記す伝承が多く書かれてきた。こうした流れをうけて、禪竹の翁論では、住吉明神の多様なありさまが翁と有機的な関係で語られるのである。古代から中世を通じて、住吉明神ほど多様なあらわれ方をする翁の神は、めったにみられない。禪竹は、『明宿集』のなかで、こうした住吉明神の多様性を総合的に考えたのであるが、そのなかでも、住吉明神を塩土老翁と直接結びつける論理が出されている。住吉明神と塩土老翁がともに海をつかさどる神として共通し、さらに、同一神とされる説がしばしば述べられてきたが、その早い例が、金春禪竹の書いた『明宿集』である。

禪竹が住吉明神と結びつけて塩土老翁をもって来る理由、またその結びつきの背景を明らかにすることにおいては、塩土老翁が芸能的翁と近い存在として考えられたかもしれないということが大きいヒントとなる。禪竹が、山幸彦・海幸彦説話をとりあげ、翁の根元を説こうとした理由は、山幸彦・海幸彦神話が、服屬芸能である単人舞の起源説話であったからではないだろうか。征服された部族の芸能が儀式化される背景には、各部族が持っていた芸能の呪力を借りて中央政權の安泰を守ろうとする意図があったのだといえる。こうした滑稽な物眞似演技の背景には、権力者側から笑われることが前提となっており、服屬する方が演じる滑稽な物眞似とそれに伴う笑いは、猿樂が滑稽な物眞似をするということと深く結びついていたと思われる。また、天皇の對極にいる服屬者がその芸能により王權を壽ぐことは、猿樂集團のあり方と重なるのではないだろうか。猿樂者が笑わせるということで祝福するという芸能のあり方の原型が、単人舞のような服屬芸能にあったのである。禪竹は、単人舞のような服屬芸能を担う種族が、中央の大和民族から異界のものとみられていたことを、自らの猿樂集團に重ねて考えていたにちがいない。こうした思考が、『明宿集』に、塩土の翁譚が書かれるような要因としてはたらいていたと考えられる。

キーワード：翁神 翁信仰 住吉明神 塩土老翁 金春禪竹 『明宿集』

투 고 : 2004. 11. 30
1차 심사 : 2004. 12. 11
2차 심사 : 2005. 1. 4

住 所 : (137 -933)서울시 서초구 반포1동 32-8 삼호가든맨션 3차 E-801
電 話 : (02)6251-7446
e-mail : hwk33@hotmail.com